

研究通信

創刊号 - 第50号 (復刻)

村落社会研究会

研究通信

創刊号 - 第五〇号

村落社会研究会

『研究通信 創刊号—第五〇号』の刊行に際して

村研がいつの間にか二〇才になった。うれしく思っている。

第一回の大会は昭和二八年（一九五三）に仙台の東北大学で開かれた。その時二〇年も続くとは思っていなかったが、いつまでも続けさせたいと私はひそかに願っていた。しかしこのことは私独りだけの願いではなく、この大会に集った人々のすべての人の願いであるということがぢきにわかった。というのはこの第一回の大会が実にすばらしかったからだ。

当時東北大学にいた木下彰や中村吉治などの仲間が大会開催について心こもった配慮をしてくれたし、村研を突りあるものにしたという会員の熱情が一つに燃えあがったからだ。経済学、史学、民俗学、法学、社会学などいろいろな専門の研究者がムラを中心とする研究を出し合い、話し合い、談論し、歓談し、宿舎を共にして深夜に及ぶという大会運営の方式は期せずして自然にできあがっていった。

最初に意識して話合った大会の運営方式はむずかしい規約でしぼることはしないでおこうというものであった。われわれは誰れも村人の素朴さを愛した。現実のムラには多くの不自由はあるが、村研は自由で、肩書を考えまいとお互いに期せずして思った。われわれは丸はだかな人間として、心と心とを触れ合わせることをただ願った。その願い通りに大会は運ばれた。別れる時にお互いにそれまでの、どんな学会よりもよかった、面白かったと言いつつ合った。

その時の感激がその後も続いて、次の大会を盛りあげた。その後大会の開催地は西に東へと交互に移ったが、集った人は毎年親しさを増し、新しい会員もふえていった。そして各自の研究を毎年深めてゆく様子がありありとわかった。

第一回の大会の頃には、日本はこれからどんな風になるのかまだ予想もつかなかった。ムラはもう大きく変わり始めてはいたが、今日ほどの状況になるとは誰れも想像もしなかった。この二〇年間の変化をみると驚かないわけにはゆかない。

しかし、この変化の激しい面に気を取られて、変わりにくいもののあるのに人はあまり気がつかないように思われる。それはもちろんムラばかりのことではなく、都会にもある。だから一国民全体の問題でもある。ともかく変わりにくいものをしっかり掴まない限り、変化そのものを深くみることはできないような気がする。

村研はその業績を立派に積み重ねつつ、二〇年を辿ったけれど、研究しなければならぬことはまだ山ほどある。初心を忘れないで、心のふれ合いの上に共同に研究しなければならぬ。

一九七二年八月三〇日

あ　　が　　き

村落社会研究会の大会も本年度で第二〇回を数えるに至りました。村落二〇周年というわけですが、その記念事業の一つとして、「研究通信」の第一号より第五〇号までを、運営・編集合同委員会の決定にもとづき、復刻刊行することとなりました。戦後日本における村落社会の研究史をかえりみ、将来の研究をおしすすめる上で、重要な資料のひとつとして活用されることを期待しております。

当初の「研究通信」は、事務局担当大学の会員が原紙きりから印刷まで、素人まるだしの謄写刷りをやってのけたので、なかには、「読めないことと有名」といわれた号もふくまれています。それらも、そっくりそのまま、ここに再現しました。また、事務局は次々と各大学の手に受け継がれ、廻りもちの事務処理をつづけて参りましたので、「研究通信」の号数が必ずしも正確に号を追わず、同じ号数のものが二つあったり、それに気付いて号数を一つとばして事実に合わせてたり、というようなこともありました。そういう不揃いも、また活字によるタイプ印刷になってからの誤植なども、全く訂正を加えず復刻しました。二百部限定出版（番号入り）というのも、世にいう豪華版の出版などをまねたのではなく、まったくの内輪の、ささやかな記念の刊行にほかならないからであります。

村落社会研究会なるものをつくりろうではないかという最初の呼びかけをされた有賀喜左衛門会員に、復刻に当たっての序文を書いていただくことができましたが、この限定出版の第一号は、われわれの研究会の結成に至る最初の提案者のお手元においていただくこととし、われわれの感謝の気持ちをあらわしたいと思います。

この「研究通信 創刊号／第五〇号」の刊行が可能となったのは、第一号からたんねんに保存されており、ころよくそれをお貸しくださった原宏・森岡清美両会員のおかげであり

これまた感謝のほかありません。

かつまた、一九七二年一〇月の第二〇回記念大会の準備から完了までの一年間、事務局を担当した民秋言会員の、本書刊行に関する積極的な企画とそれを具体化するための実務上の献身をぬきにしては決して実現しえなかつたものであります。

村研運営・編集合同委員会における決定が、このような形で実現をみたことについて、関係各位の示されたなみなみならぬ協力は、さすが「村研」だけのことはあると思う次第であります。

さいごに、技術的に大変困難の多い本書の電子複製について、社長みずからそのテストに当り、紙質の悪い用紙に手刷りされ、すでに黄ばんでさえている初期の「研究通信」を、このような形で再現するため誠意をつくされた豊文堂寺杣栄吉氏の努力とその成果に心からの謝意をあらわしたいと思います。

一九七二年一〇月一日

村落社会研究会

編集委員 福

武

直

「研究通信 創刊号—第50号」

16 076

発行 村落社会研究会

事務局 東京都小平市小川町1-830 白梅学園短期大学内

発行日 昭和47年10月1日

印刷 豊文堂印刷株式会社

東京都立川市羽衣町2-7-2

(0425) 22-5325

假梅村落研究会設立について

日本において村落の社会学的研究は社会学の实证的分野で最も早く着手され、最も見多(多)業績を挙げ重宝されてきたといわれる。そしてその向において同学の研究連絡の企ても一度行われきたが、戦後においては、研究者の数が増加したのに拘らず、研究の連絡を缺いていたので、個々の研究の成長を阻害させる事も少くなかったように思う。それ故研究者各自において研究連絡の必要を痛感する人が多く、その連絡組織を要望する声がだんだん高められてきた。

ところが去る拾月下旬の才廿五回日本社会学会大会の折、期せずと同学の今々の間に右の件に関し懇談がかわされ、共同的に研究活動をする新しい組織の成立を企てられることになった。その際に在京同学の者が集り、その組織設立の原案を作つて、各地の同学の人々に提案し、審議を求めようとする要望を述べた。そこで去る十一月十日

赤門学会館に在京の人々のうち次の人々が集つて次の事項を原案として作成をみた。

出席した人々は有賀左三門、武田良三、米林富男、福武直、甲日和衛、中島亮太郎、水原健太郎、服部治則、中野卓、塚本哲人、森岡清美、青井和夫、

比川隆吉の十三名であった。

趣旨

1. 本会は村落研究に於いて社会学徒のみならず、他の専門分野との連絡を密にして、村落研究の発展を期したい。

2. この方面における従来の研究成果を紹介批判し、今後の研究の連絡を密にしたい。

3. 法外の村落研究の紹介に於いて、出来ば海外の学者と共同調査をもしたい。

事業計画

1. 研究集會

2. 日本社会学会大会の翌日一日を以て、毎年の宿題研究に關する共同討論會を開催する。

3. 宿題は毎年右討論會の際翌年度のものを決定し、各自で調査研究し、次年度

共同討論會に於いて発表する。但しその研究を日本社会学会などによつて各自の研究報告とすることを妨げない。

4. 右の年一回の共同討論會以外に各地において會員の研究會をいんばんに開き、村落研究活動も活発に行なう。

2. 出版

本会機関紙として年報を出版する。これには主として共同討論會の成果を発表し、既成の業績の紹介批判、関係諸科学の業績紹介、海外の研究動向の紹介等を行なう。

今後の研究会に役立てたい。さらに出来たら簡易な研究会通信(月報の類)を

発行し研究会の便に供したい。(年報の出版については目下交渉中)

3. 會員及會務

2. 會員は村落の社會学的研究会に興味を持ち共同の研究活動も希望する諸科学
分野の研究者をひろく合める。

3. 會員は差当り入會費百円通信費百円とする。暫定的処置として地方毎に通信
連絡員を依頼し入會事務を取扱ってもらう。これにより各地の研究集会の基礎を
こめらる。

4. 本部事務は差当り東京教育大学社會学研究室におき取扱い、將來は會員の
所屬する各大学研究室の輪番担当にしたい。

5. 初年度の計画

5. 一九五三年度の共同討論会は、来年七月十日仙台におき行われ、八月廿六日日本

社會学会大会の翌日行ふ。

6. 右共同討論会の宿題については、入会希望者が各々希望する宿題について意見を至急送って頂き、これにより至急宿題も決定する。

C. 年報イ号は假称「村落研究」の成果と課題の特輯とし、日本における村落研究の各分野における研究者に分担執筆してもらおう。

① 其他の件案

a. 会の名稱は村落研究会は假稱であるが、適当な名稱についての提案もしてもらった。例えは村落社会研究会、村落社会学会等、しかし最初の打合せです。本会はいくらに形式ばつたものでなく、本心に研究中心の会にしたいという意見が圧倒的で名稱もそれにあつておもしろいものになり、心に
假稱村落研究会としてはどうかとの意見であった。村落といつたのは農村のみでなく、漁村等を含めてのつもりである。

水原案に関する少意見は、神奈川縣逗子町久木三四の有賀喜左門宛に送って頂きたく存じます。そのメ、切期日を一月十五日といはします。

右の意見が集つた上で研究会の準備会を一月廿五日(日)午前十一時東京
大学外赤門学士会館においていたしますから成るべく多数の方々の出席を
お願いいたします。尚出席の方は予りお知らせ下さいれば好都合でございます。

なお入会金 会費計二百円也の拂込みについては、近日中には振替口座を東京
教育大学文学部社会学研究室にお送りつけ早速おしらせすることに致します。

一九五二年 十二月廿日 発起人

(不口八順)

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 内 | 武 | 米 | 川 | 服 |
| 藤 | 田 | 林 | 越 | 部 |
| 菫 | 良 | 富 | 淳 | 治 |
| 爾 | 三 | 男 | 二 | 則 |

鈴	関	喜	木	有	秋	甲	山	小	福	牧	中	中
木		多	原	賀	彦	田	木	山	武	野	野	島
崇		野	健	喜								藤
太	清	清	太	左		杉						太
郎	秀	一	郎	工	隆	衛	登	隆	直	巽	卓	郎

一九五三年一月二十五日假称村落研究会設立準備会をしましたが、決定した大綱は次のようなものでした。

村落社会研究会会則

- A. 名称 本会を村落社会研究会とする。
- B. 趣旨 本会は村落社会の研究について専門各分野の連繋を密にし、その研究の発展を期する。
- C. 事業

1. 研究集会

- a. 毎年共同の宿題を定め、年一回宿題研究に関する共同討論大会を開く。
- b. 宿題は毎年の討論大会の際、翌年度のものを決定し、各自で調査研究、又は適宜共同調査をも行ない、次年度の共同討論大会において発表し論議する。
- c. 共同討論大会以外に各地において、会員の研究会を頻繁に開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動を盛んにする。

2. 出版

本会機関紙として年報を出版する。これには主として討論会の成果を発表するが、其他に内外の研究業績の紹介、批判等をも載せる。又、研究通信も発行して、研究の推進に資しむ。

共同調査

会員相互の共同調査を行うと共に海外の学者との連絡を密にし併せて共同調査をも企てたい

D. 会員及会務

1. 会員は村落社会の研究に関心を持ち 共同の研究活動を希望する諸科学分野の研究者をひろく含める
2. 会費は差当り入会費百円 通信費百円とする
3. 本会に本部をおく

振替口座 東京電参貳八八六番 村落研究会

註
 既に会名確定以前より早く口座を開設するため
 旧假結で届出であるので 改名手続きがすま
 まで 口座拂込みに関する場合のみ 当分の
 のように旧假結を使用して下さい

4. 各地方毎に支部をおく

附則

1. 共同討論大会は便宜上当分日本社会学会大会の翌日をもその開催地の適当な場所において開く
2. 本会の事務を綜轄する本部を都合上差当り東京教育大学社会学会研究室におくが 将来は会員の所属する各大学研究室の輪番担当とする

以上

なお同日（第二回打合せ会）の席上 きめられた一九五三年度の計画は次のようであります

一九五三年度の計画

1. 一九五三年度共同討論大会は十月仙台において開かれる筈の第二十六回日本社会学会大会の翌日東北大学で開きたい
2. 右共同討論会の宿題は未定であるが 急速にきめなければならぬから 至急御意見を次回会合まで申し送って下さい 前回会合では「農地改革の村落構造に及ぼした影響」という案がでていますが なお考える余地も多々ありませうから 別の案でもぜひお願いしますが 年報第一号は「村落研究の成果と課題」の特輯とする この編輯は次の会合できめるはずであるが 項目・執筆者等につき 具体的御意見をうけたまわりたい
3. 年報に文献目録を載せるが その作成に関する方針（分類・記載方法等）についても 次回会合までに具体案を御持ち帰り頂きたい
4. 会の運営に関する各種の委員を設ける必要があると思うが それについても御意見を寄せてお寄せ下さい

5 討論大会の運営の基本方針についても同様

次回の会合は次の如くおこないますから 万障おくりあわせのうえ
どうか おいでください

第三回 打合せ会 通知

一、日時 二月二十二日(日) 午前十一時より午後三時頃まで

一、場所 東大赤門横 学士会館

前掲一九五三年度の計画のうち、えくらの諸事項に
つき具体案をお持ちより下さるよう、かさねてお願い
申し上げます。便宜上、神奈川県鎌倉市町久木三四〇
有賀表左衛門宛、御手紙による御意見は、およせ下さい

東京都文京区大塚野東京教育大学社会学研究室 氣付

村落社会学研究会